

日本語におけるスル的・ナル的表現の語用

徳永美暁

1. はじめに

語用的に、日本語は「ナル的な言語」で、英語は「スル的な言語」と言われている(池上, 1981, 1982, 1991 他)。つまり、日本語は動作主を明示しないで、ある事柄を客観的に表現する「ナル的」な傾向があり、英語は動作主・経験者を主体として表現する「スル的」な傾向があるということである。このことは、下記の慣用表現の例にも見られる。

- (1) a. (私は) 頭が痛い。
a'. I have a headache.
b. (あなた) 頭が痛いのですか?
b'. Do you have a headache?
- (2) a. この辺りは雪が沢山降りますよ。
a'. We have lots of snow around this area.
b. 今年は雨が多かったですよ。
b'. We had lots of rain this year.

日本語では、「誰が」頭痛の経験者なのか、「誰にとって」雪や雨が多いのかについての明示は言語表現上必須条件ではない。しかし、英語では、頭痛や自然現象の体験者としての人間を明示するのが自然な表現である。これらの例は、池上(1981, 1982, 1991 他)が主張するように、日本語には動作主を明示しない「ナル的な表現」をする傾向があり、英語は反対に動作主・経験者としての「人間」を明示した「スル的な表現」をする傾向があるということを示している。この「ナル的な表現」とは「自動詞的な表現」、「スル的な表現」とは「他動詞的な表現」と言い換えることもできるであろう。

本稿では、動詞「する」と「なる」は、それぞれ他動詞と自動詞であることから、自・他動詞の意味特徴を明らかにし、話者が関与する事柄を表す場合の「スル的表現」と「ナル的表現」がどのような語用機能を有するのかを考察する。そして、日本語では、話者が自分の意志で他者に働きかけをしたという事を明示することがポライトネスにかなっている場合には、「スル的表現」の使用が語用的に適格であるが、話者が他者に恩恵を与える授与者である事態を表す場合は、「ナル的表現」が適格表現となる。それは「ナル」によって、まるで話者は関わりなくその事態が自然発生的に起きたかのように表すことができ、語用的にポライトな適格表現となるということを検証する。

本稿では、まず、他動詞と自動詞の本質的な違いを概観し、日本語における「スル的表現」には「意志性」を伴う他動詞と自動詞が含まれることを確認する。そして、「意志性」と「非意志性」の動

詞の使用が、日本語における「スルの表現」と「ナル的表現」であることを示す。また、それらの表現が、語用の中で話者と他者との関わりにおいてどのような機能を有しているのかを考察する。

次節では、他動詞と自動詞について先行研究を概観する。第3節では、日本語における「スルの表現」と「ナル的表現」と話者が関わる事柄の表現について考察する。第4節は、本稿のまとめである。

2. 他動詞と自動詞

他動詞と自動詞のどちらを使用しても同じ事柄を表現することができる。下記の例文(3)~(5)のaは他動詞文、bは自動詞文であるが、どれも結果的には同じ事柄を表している。

(3) a. (私が)花瓶を壊した。 / b. 花瓶が壊れた。

(4) a. (私が)家具を動かした。 / b. 家具が動いた。

(5) a. (私が)家を建てた。 / b. 家が建った。

上の例文はaもbもそれぞれ結果として同じ事柄を表している。(3)は花瓶の破壊を、(4)は家具の移動を、(5)は家の建築を表しているが、aとbの文の違いは使用している動詞にある。a文では他動詞を、b文では自動詞が使用されている。他動詞文では行為を行ったものが()に入っているのので、実際の発話であれば明示していないということを意味する。それでも、「花瓶を壊した」と話者が言えば、花瓶を壊した行為者が存在し、それは日本語の語用では主体を明示しない時は「話者」とあると解釈される。しかし、「花瓶が壊れた」という自動詞文では、動作主は暗示もされていないので、誰かが壊したという意味合いは全くない。文形式上は自然に壊れたということになる¹。このように、他動詞文と自動詞文では、語用的に大きな意味の違いをもたらす。

本稿の目的である日本語の「スルの表現」と「ナル的表現」について考察するためには、動作主・経験者を明示する他動詞の意味特徴と複雑な自動詞の意味特徴について考察する必要がある。2.1.では、他動詞の意味特徴について、2.2.では自動詞の意味特徴について先行研究を概観する。

2.1. 他動詞の意味特徴

動詞の他動性については多くの研究があるが、本稿では代表的な Hopper & Thompson (1980) と Jacobsen (1991) の研究を概観し、他動詞の意味特徴について、本稿で論じる語用分析に直接関わる範囲で明らかにしておく。

Hopper & Thompson (1980) (以後、H & T) は、他動性の意味素性として10の特徴を取り出し分析している。それらを(6)に示す²。

1 子供が自分が花瓶を壊したことを母親に報告する場合に、「花瓶が壊れちゃった」という自動詞文で言うことがある。この報告に対して母親は「壊れちゃったじゃないでしょ! 壊したんでしょ!」と自分が壊したことをきちんと言いなさいという意味合いで他動詞文で言わせようとすることがある。このような事例での自動詞文の使用は、行為者を明示していないが、状況的に行為者が分かっている場合、語用上は自動詞文を使用することで、行為者を意図的に明示しないこともある。

2 日本語訳は井上(1995)に基づく。

(6)	他動性	高い	低い
①	参加者 (Participants)	2人またはそれ以上	1人
②	動性 (Kinesis)	動作 (action)	非動作 (nonaction)
③	相 (Aspect)	完了 (telic/perfective)	非完了 (atelic)
④	定時性 (Punctuality)	定時的, 瞬間	非定時的, 継続
⑤	意志性 (Volitionality)	意志的	無意志的
⑥	肯定 (Affirmation)	肯定的	否定的
⑦	モード (Mode)	現実 (realis)	非現実 (irrealis)
⑧	動作主性 (Agency)	動作主の潜在能力が高	動作主の能力が低
⑨	目的語への影響 (Affectedness of O)	完全な影響	影響皆無
⑩	目的語の個別化 (Individuation of O)	高度な個別化	個別化皆無

H & T の提示する他動性の特徴は、学校文法で「他動詞は目的語をとる」という定義にあるように、⑧の動作主（主語）と⑨のその影響を受ける被動者（目的語）の少なくとも①の「参加者が2人かそれ以上存在する」ことが基本とされる。また、②は主体は動作主であり、当然それは「動性」を意味特徴として有していることになる。更に、動作主は「意志的」にその動作をする（⑤）ということも他動性の特徴である。

Jacobsen (1991) は、少なくとも2つの名詞句の項 (argument) があって意味をなすのであれば (H & T の①⑧⑨)、その述語 (predicate) は他動性 (transitivity) があるが、そうでない場合には、それは自動詞であると仮定した定義をし、その定義が実際に妥当であるかを(7)の例を挙げ検証している。(p. 2)

(7) a. Mary is fond of chocolate ice cream.

メアリーはチョコレートアイスクリームが好きだ。

b. 僕の考えはあなたのと違う。 (NP が NP と)

(Jacobsen, p. 3)³

Jacobsen はこれらの例は、2つの名詞句（下線部）を項として有しているが他動性はないことから、この特徴は他動性に必須のものではないとし、(8)~(11)の日本語とそれに対応する英語の例を検証している。例文中の（ ）は表層上省略されている部分を表す。

(8) a. (僕には) お金₍₁₎が要る。(NP に NP が)

b. I need money. / Money is necessary.

(9) a. (僕には) 時間₍₁₎がある。(NP に NP が)

b. I have time. / There is time.

(10) a. (僕には) あの人の気持ち₍₁₎が分かる。

b. I understand that person's feelings well. / That person's feelings are very

3 Jacobsen の日本語の例文はすべてローマ字表記であるので、筆者が日本語表記に直したものである。

understandable.

- (11) a. (僕には) このビデオが一番おもしろい。(NPにNPが)
b. This video-tape is the most interesting to me. / This video-tape is the most interesting. (Jacobsen, p. 4)

Jacobsen (1991) は、日本語の省略されている経験者名詞句 (experiencer noun phrase), つまり, 表層上は明示されていないが、意味上 () で示されている「僕には」を含む文に対応する英語は b の 2 つ目の文であると説明している。そして、b の 2 つ目の文の動詞は、状態性の動詞 BE であるが 2 つの名詞句をとっていることを指摘している。この事実は、学校文法での他動詞の定義が、「他動詞は 2 つの名詞句をとる動詞」であり、「2 つの名詞句とは主体の意味役割を有する名詞句と被動者の意味役割を有する名詞句のこと」であるという特徴が他動詞だけのものではないという事を示しているとして、これらを他動詞固有の特徴とすることに疑問を投げかけている。この Jacobsen の指摘は、H & T の①⑧⑨の特徴にも当てはまる。

次に、Jacobsen (1991) は他動性の特徴を決定するのが難しい点として、漢語動詞 (Sino-Japanese) と呼ばれる「する動詞」には、他動詞と自動詞があることを挙げている。(12)~(14) は Jacobsen の例である。

- (12) a. 運転手が車を移動した。 The driver moved the car.
b. 車が移動した。 The car moved. (Jacobsen, p. 5)
- (13) a. 連合軍が敵を包囲した。 The allied army surrounded the enemy.
b. * 敵が包囲した。 The enemy surrounded.
- (14) a. 子供が成長した。 The child grew.
b. * 親が子供を成長した。 The parents grew the child. (Jacobsen, p. 6)

(12)~(14) の例文は、日本語と英語では動詞の他動性が同じではないことを示している。(12) は日本語の「移動する」、英語の move 両言語とも他動詞でもあり自動詞でもある例である。(13) の日本語の「包囲する」は他動詞であり自動詞としての役割はもたないが、英語では他動詞でも自動詞でもあることを示している。(14) は、日本語の「成長する」は自動詞であり他動詞ではないが、英語の grow は他動詞でも自動詞でもあることを示す例である。

このことから、Jacobsen (1991) は、学校文法が「目的語を取る動詞」というように論理的に他動詞を定義するのは難しいと述べている。しかし、「目的語 Object」という語について特定化した表現を避ければ、他動詞の定義づけは可能であると主張している。それは、(15) の 4 項目に集約される。

- (15) ①その出来事に関与している実体が二つある。
②「動作主」と呼ばれる実体が意図的に動作を行う。
③「目的語」と呼ばれるもう一つの実体に変化する。
④その変化は現実の時間内に起こる。 (Jacobsen, p. 8)⁴

4 原文は英語であるが、訳は井上 (1995) である。

井上 (1995, p. 110) は、上の Jacobsen (1991) の他動性の特徴を、先に提示した H & T (1980) の主張と比べ共通点を(16)のようにまとめている。(iii)の「被動者」は文中「目的語」として表れる。

- (16) (i)二者の参加 (義務的参加者), (ii)意図的動作, (iii)被動者の変化,
(iv)直接的作用, (v)非状態性

井上のまとめ(16)の(i)の二者の参加については、統語的条件であって、Jacobsen (1991) の例(8)～(11)で検証されたように、語用的には日本語では義務的明示ではなく潜在的存在とし、状況に応じて必要性があれば表現上登場するということになる。従って、本稿では、日本語の語用における他動性の定義を(17)とし分析を進める。

- (17) 日本語の語用における他動詞的表現は、「動作主」の「意図性」を示し、その行為によって被動者が影響を直接的に受けることを表す。また、被動者は動作主の行為によって変化する可能性も示す。しかし、「動作主」と「被動者」の明示は義務的ではないが、動詞によって暗示されるものである。

次項では、「自動詞」について Jacobsen (1991) と佐藤 (2005) の研究を中心に見ていく。

2.2. 自動詞の意味特徴

佐藤 (2005) は、日本語と英語における他動詞と自動詞という用語に見られる語構成上の違いは、日本語では、「自」と「他」という対をなす接頭辞による対立があるが、英語では「transitive」に否定の接頭辞を付加することによって「intransitive」という形式が派生されていることであると述べている。このことは、佐藤も指摘しているように、単に語構成上の問題だけでなく、他動詞と自動詞の意味の捉え方にも反映していると思われる。また、佐藤は、H & T (1980) が他動性の意味特徴をあげているが、自動性の意味特徴には言及していないことにも注目している。氏によれば、「語構成のあり方から考えるならば、他動性とはそれ自体が原理的に1つの極をなす積極的な概念であるのに対し、自動性とは『それ以外』という消極的な形で規定される非自立的な概念にすぎない」(p. 9) のであるから自動性のプロトタイプとしての意味特徴などを規定外とするのは当然であると述べている。

佐藤 (2005) は、自動詞が「他動詞ではないもの intransitive」という消極的な形でカテゴリー化されたため、他動詞の観点からすると自動詞のカバーする領域は雑多であり、それらの中心をなす極を1つだけ見いだすのは困難であると述べている。そして、我々が外界をどう捉えるかの基盤となる認知的観点からみても、自動詞がカバーする意味的領域が意味のない消極的なものではないと主張している。その上で、佐藤 (2005) は、自動詞の意味領域を下記のように整理している。(p. 10)

- (18) 自動詞の意味領域:
静的事象—①アル型
動的事象 { ②ナル型—変化主体
 ③スル型—動作主体

(18)の①の「アル型」は存在動詞の「ある」「いる」のことである。②の「ナル型」は動的事象(動

き)を叙述し、主体は「非意志的」であることを示す。佐藤の分類では、ナル型には「なる」「壊れる」「切れる」「こぼれる」などがある。③の「スル型」は、動的事象を叙述し、主体は「意志的」にその行為を行うということを示す。佐藤の例では、「歩く」「泳ぐ」「出発する」などの動詞である。

Jacobsen (1991)によると、本居春庭(1828)と権田直弼(1884)は自動詞を形態的に「^{おのずから}みずから naturally a matter of course」と「^{みずから}自ら by oneself, of one's own」の2つに分類していると指摘している。Jacobsen (p. 92)によると、本居と権田の「^{みずから}自ら」と「^{おのずから}みずから」の区別を、北條(1977)は「動詞性というものが動詞自体にあり外には及ばないもの verbness is confined to itself and does not extend to the outside」として「自発相 spontaneous voice」と「能動相 active voice」に分けている。また、島田(1979)は、「^{おのずから}みずから」動詞は「動詞の主語の自然な変化の状態」^{みずから}「自ら」動詞は「主体的な行動」と捉えている。

佐藤(2005)による自動詞の分類の③「スル型」は主体の「意志性」を含む。従って、これは北條(1977)の「能動相」、島田(1979)の「主体的な行動」をとる自動詞は、本居(1828)と権田(1884)の「^{みずから}自ら」の自動詞であると言える。そして、このタイプの自動詞は、本稿で考察する「スル的表現」として使用される自動詞である。権田(1884)による「^{みずから}みずから」自動詞(動作主の動作を表す)の例は2種類ある。対応する他動詞をもつものと、持たないものである。対応する他動詞をもたない「^{みずから}みずから」自動詞は、「走る」「進む」「渡る」「寄る」などで、対応する他動詞をもつ「^{みずから}みずから」自動詞は、「伏す(伏せる)」「起きる(起こす)」「座る(腰を据える)」「寄る(寄せる)」などである。これらの例にも示されるように「^{みずから}みずから」自動詞は「意図的な行為」を表す。

本居(1828)と権田(1884)の「^{おのずから}みずから」自動詞は、北條の「自発相」、島田の「動詞の主語の自然な変化の状態」であり、本稿で考察する「ナル的表現」に使用される自動詞である。「^{おのずから}みずから」自動詞の例は「枯れる」「濡れる」「溶ける」「破れる」(Jacobsen, 1991: 92)などであるが、どれも自発的で自然発生的な事態の変化をもたらす事象を表す「非意図的で、非動作主を示す名詞句を1つとる動詞」である。

本稿で、問題としているのは、「ナル的表現」としての「自動詞的表現」であるので、佐藤の分類の特に②の自動詞の「ナル型」の意味特徴に焦点を当て考察を進めていく。

次節では、日本語の「スル的表現」と「ナル的表現」を考察し、それらが日本語の語用表現としてどのような特徴を有しているかについて言及する。

3. 日本語の「スル的な表現」と「ナル的な表現」

言語は構造上、事象をスル的にもナル的にも表すことができる。しかし、どの文化においても、状況によって、ある事柄を表すのに、動作主とその意図性を明示した「スル的表現」が求められる場合と非意図的で自然発生的な「ナル的表現」が求められる(好まれる)場合がある。池上(1981, 1982, 1991他)が主張するように日本語が「ナル的言語」であり、英語は「スル的言語」であっても、語用上はどちらの表現も状況に応じて表れる。本節では、日本語における「スル的表現」と「ナル的表現」について考察する。

3.1. では、話者が他者のためにした行為を表現する場合の「スル的」と「ナル的」表現を考察する。3.2. では、「～することにする・～することになる」という表現の語用的ニュアンスについて考察する。そして、3.3. では、日本語の「謙讓語」と「尊敬語」の敬語構造と慣用的表現である「世

話をする・世話になる」に使用される「スル」と「ナル」について考察する。

3.1. 話者の行為表現における「スルの」と「ナル的」表現

日本語では、話者が他者のためにした行為については(19)のような「ナル的(自動詞的)」に主体を明示しない表現が慣用的に好まれる。反対に、他者が話者のためにした行為については、(20)のような動作主を明示する「スルの(他動詞的)」な表現が求められる⁵。

- (19) a. (母親が家族に)「ご飯, できましたよ」
b. (友達に部屋を片づけてあげて)「部屋, きれいになったよ」
c. (弟の宿題をしてあげて)「宿題, 終わったよ」
- (20) a. 山田さんが数学を教えてくださいました。
b. 洋子さんがボクもパーティーに呼んでくれて, 嬉しかった。
c. 腕の良い棟梁が頑丈な家を建ててくれたんですよ。

日本語では、(19)のように、話者が他者のためにした行為の結果が、まるで自然発生したかのように表すのは最も自然な表現形式である。(19)aは英語でも「Dinner is ready」と料理をした人が言うが、bを英語では「I cleaned your room」やcを「I've finished doing your homework」のように、動作主である話者を主語にした表現が一般的である。反対に、日本語では(20)のような、他者が話者のためにした行為については、動作主を明示し、それが話者の為であり感謝していることを表す「くれる」を付加するのが適切で自然な日本語表現と言える。英語では、「くれる」のような主語中心動詞⁶を付加する必要がなく、動作主を主語とし、その意図性を明示する文が自然な表現となる。次項では、日本語の「～することにスル」と「～することにナル」という表現における「スル」と「ナル」について検証する。

3.2. 「～することにスル」と「～することにナル」

日本語では、同じ事柄を表すのに「～することにする」「～することになる」という表現を使用することがある。本項では、これらの表現における「スル」と「ナル」がもたらす語用機能について考察する。まず、(21)の例文をみてみよう。

- (21) a. (友人に報告)「オレ, 結婚することにしたよ」
b. (会社の上司に報告)「私, この度, 結婚することになりました」

(21)の表現における「スル」と「ナル」は、日本語のポライトネス表現にも関係があると考えられる。友人に自分の結婚を報告する場合、(21)aのように「スル」を用い自分の意志で結婚するということを明示するのはごく自然である。勿論、照れて言う場合に「オレ, 結婚することになっちゃってさ」のように、自分の意志ではなく、誰かに無理矢理結婚を決められたかのように言うこともあるのである

5 話者が他者のために行う行為の表現には「先生に仕事のお手伝いをさせていただいた」のような表現もある。このような表現では、行為者である話者の意図が明示されており、ある意味「スルの表現」と言えるが、これは謙讓表現として捉えられるので、3.3.で扱う。

6 Tokunaga (1985, 1986, 1993), 徳永 (2005) を参照のこと。

う。しかし、会社の上司など目上に報告をする場合、bのように「ナル」を使用することで、第3者の結婚の報告のように客観表現を用いることが、よりポライトであると受け止められる。(21)の表現にある「～することにする」と「～することになる」は、結婚に限らず、広く使い分けられる形式である。そして、その使い分けによる語用的ニュアンスの違いは、話者が関与する事柄を表す場合には、(21)のように特に顕著になる。(22)～(24)もその例である。

- (22) a. 来年、留学することにしました。
b. 来年、留学することになりました。
- (23) a. 今度、親戚の子の面倒をみることにしました。
b. 今度、親戚の子の面倒をみることになりました。
- (24) a. 今年、家を建て替えることにしました。
b. 今年、家を建て替えることになりました。

上の例の「スル」を伴うa文は、どれも主体の意志での行為を表している。そして、「ナル」を伴うb文は自然にそういう事態になったということを表し主体の意志を全く示していない。言い換えると、a文は主体の意志が明快な表現であるが、b文は「誰の意志」でその事柄が成立することになったのかが分からない。それは、話者の意志かもしれないし、話者以外の決定権のある人物によって決められたのかもしれない。こうすることで、話者の存在を表現上消すことができ、客観表現を達成し、また主体を曖昧にした間接表現を使用することでポライトネスを実現していると言える。

次項では、日本語の敬語の「謙譲語」と「尊敬語」の構造に焦点を当て、「スル」と「ナル」が、話者と他者の行為の表現として用いられている事実から、日本語における「スル」と「ナル」について、3.1.と3.2.で考察した「スルの表現」と「ナル的表現」に共通するポライトネスの概念について考察する。

3.3. 敬語構造に表れる「スルの」と「ナル的」表現

日本語の敬語は(25)のa「尊敬語」、b「丁寧語」、c「謙譲語」に分かれる。「尊敬語」は尊敬する他者を主体とした表現、「丁寧語」は接辞「-ます」で表される一般的な丁寧表現、そして「謙譲語」は話者自身の行為を示す表現である。

- (25) a. 田中先生はご自分で重い荷物をお持ちになった。
b. (私が) 田中先生の荷物を持ちます。
c. (私が) 田中先生の荷物をお持ちします。

本稿では、「スルの」と「ナル的」表現の考察を目的としているので、本項では、aの「ナル」を伴う「尊敬語」とcの「スル」を伴う「謙譲語」の構造について考察する。「尊敬語」は話者が他者の行為を表す場合に用いるが、その構造は「ナル」を伴う「おVになる」である。反対に、話者自身の行為を表す「謙譲語」の構造は「スル」を伴う「おVする」である⁷。

7 Vは動詞の連用形(ます形)の語幹stemである。

「尊敬語」は、「ナル」を伴い主体が話者にとって尊敬する存在である場合に使用する表現である⁸。池上(1981, 1982, 1991 他)は自然発生を強調する表現について詳しく考察している。池上は「オ殿様ノオ成り」という表現の「ナル」は、お殿様という個体の場所的な移動(発生)が〈状態の変化〉として捉えられる視点を表していると述べている。つまり、そこに存在していなかったお殿様が超自然的な力によって現れたという表現が、この場合の「ナル」であるというのである。そうであれば、尊敬語の形成に「ナル」が使用されるのは理解できる。話者にとって尊敬する個体の行為は、意志性を有する個体の行為と捉えられるものではないということの表れではないであろうか。

反対に、「謙譲語」は話者自身の行為を表し、「スル」を使用することで、自分の行為が自身の意志であることを示している。つまり、「ナル」とは反対に、自分自身という個体が現実的な実体であり、その行為は自身に帰属し自身の意志によってもたらされるものであることを示しているということになる。話者の他者への行為を表す場合、主体の意志性を示すことで謙譲というポライトネスを示すことができる「スル的」表現に、「先生にお仕事のお手伝いをさせていただきました」という「使役+受動詞」がある。これも話者の先生のお手伝いをするという行為が、話者の意志で主体的に行うものであり、その行為をすることを許してくれた受け手(先生)への感謝を受動詞「いただく」で示したものである。よって、このような表現も「スル的」表現である。

このように謙譲語と尊敬語に見られる「スル」と「ナル」のポライトネスにかかわる語用機能は、慣用表現としての「世話をスル・世話にナル」にも観察される。

- (26) a. お世話をしました。
b. お世話になりました。

(26)は、「誰が誰を世話をしたのか」が明示されていない。にもかかわらず、aは「話者が他者の世話をした」ということが分かる。また、bは「他者が話者の世話をした」ということが分かる。このことは、話者が直接関与する事柄を表す場合「話者を明示しない」という日本語の語用の基本規則により、aの動作主が明示されていないということは「スル」の主体は「私」であり、世話の受け手は他者であるということが分かる。また、尊敬語の構造の構成要素である「ナル」は、主体が尊敬の対象である場合は、それを明示しないという日本語の特徴から、その主体は他者であり、その受け手は「私」であるということが分かる。(26)bの「世話になる」の場合、世話を受けた対象が明示されていなくても、話者であることは分かるが、「世話をした」のが誰かはまるで分からない。このことから、(26)の慣用表現は次の疑問をもたらす。何故「私」が他者の世話をする時には主体を明示あるいは暗示する「スル」動詞を使用し、自分が他者に世話を受けた時には主体を暗示もしない「ナル」になるのだろうか。

その答えは、先に述べた敬語構造における「スル」と「ナル」についての池上と荒木の考察にある。これらの表現における「スル」と「ナル」は、日本語のポライトネス表現に関係があるということである。つまり、他者の行為を表す場合には、日本語ではその行為者を明示しない傾向があるという日本文化に特徴的な思想からの発想ではないかということである(池上, 1981, 1982, 1991; 荒木, 1980, 1983)。

8 実際の語用においては、美化語として話者の言葉遣いとして慣習化している場合があり、必ずしも主体に対する尊敬を表す訳ではないことに注意。

本節では、日本語の「スル的」と「ナル的」表現について考察した。3.1.で考察した「ナル的」表現は、話者が他者のために行った結果もたらされた「状態」に焦点を当てた。これらの「ナル的」表現は、話者が他者に恩恵を与えた結果もたらされた「状態」を表すが、自然発生的な状態としてその行為の結果を表現することで、他者への負担を軽くし恩着せがましくなく表すということである。つまり、それは日本語ではよりポライトな表現であるということを示している。また、3.2.の慣用表現における「スル的」と「ナル的」表現は、話者自身が関与する事柄を表す時には、聞き手との親疎・社会的関係において使い分けをすることがポライトネスにかなっているということを示している。自分自身の結婚や留学や家の建て替えに至るまで、聞き手との関係が親しく遠慮のないものであれば「スル的表現」を使用するが、聞き手と疎の関係であったり、聞き手が目上であれば「ナル的表現」を使用する。また、「世話をする」や「世話になる」という慣用表現についても、3.3.で考察した「謙譲語」では主体である話者の意志が明示され、「尊敬語」では「ナル」を使用することで、主体の意志性は明示されない。この敬語構造における「動作主」の意志性の明示・非明示がポライトネスと関係していることが分かる。

4. 結 び

本稿では、日本語における「スル的表現」と「ナル的表現」を考察し、前者は主体の意志を表し、後者は状態性を表すことを検証した。考察対象は以下の3点である。

- ①動作主を明示する「スル的表現」と話者の他者への行為の結果を「ご飯、できましたよ」のように主体を表さない「ナル的表現」を使用する場合。
- ②「～することにする」と「～することになる」という表現の語用的ニュアンスの違いと使い分けについて。
- ③話者が他者のために何かを行う状況での「謙譲語」としての「スル的表現」と他者の行為を表す「尊敬語」としての「ナル的表現」と「お世話をする・お世話になる」のような慣用表現に表れる「スル的表現」と「ナル的表現」。

これらの考察結果は、「スル的表現」は主体の意志を明確に表すことで、それが話者が他者へ恩恵を与える行為であれば、①の場合は、他者が話者の為にした行為については、動作主を明示し話者がその行為の受け手であることを表す。そのために、同時に話者の感謝を表す「くれる」を補助動詞として付加することが一般的であり、日本語のポライトネスにかなう表現である。反対に、話者が他者のために行った行為の結果を表す場合には、「ナル的表現」を使用する。これは、話者が相手に恩着せがましくならないよう主体を明示しないで、自然発生的にその結果が起きたかのように示すためである。

②の場合は、話者の行為の表現としての「スル的」と「ナル的」表現について考察した。この場合、話者の行為が意志によって行われたことを表す「スル的表現」が使用されるのは、聞き手との関係が親しいか社会的に同等かそれ以下である場合である。しかし、相手との関係が疎であったり、目上であったりする場合には、同じ事柄でも「ナル的表現」を使用することでポライトネスを実現している。

③の敬語構造に見られる「スル的」表現は「謙譲語」であるが、語用的に謙譲語の使用は、話者が相手のためにする行為を申し出ることによって自分の意志であるのだということを表す。そのために、話者が恩恵を与える、または与えたという恩着せがましが消える。また、尊敬語は主体の意志や存在を

示さない「ナル」を伴うことで、他者の行為が自然発生的に起こったように表現することができる。そのため、間接的な客観表現となり尊敬を表すことができる。

本稿では、日本語の「スル的表現」と「ナル的表現」を考察した。その結果、次のことが明らかになった。

- (i) 主体の意志性を示す「スル」は、より実体を顕著に示す他動詞的表現であり、話者が自分の意志での働きかけを表すことが語用的に適当である時に使用される。
- (ii) 「ナル」は実体の存在を表さない自動詞的表現であり、自然発生的に事態を表すことができ、客観表現が語用的に適当である時に使用される。
- (iii) これらの動詞の使い分けの語用的状況については、話者の行為と他者の行為の表し方というだけでなく、伝達する相手との関係にも左右され、ポライトネスに大きく関与している。

本稿での考察結果を踏まえ、今後は「スル的表現」と「ナル的表現」とポライトネスの関係について更に研究を進めていくつもりである。

参考文献

- 荒木博之 (1980) 『日本語から日本人を考える』朝日新聞社
- . (1983) 『敬語日本人論』PHP 研究所
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店
- . (1982) 「表現構造の比較—〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語—」, 国広哲弥 (編) 『日英語比較講座 4 巻: 発想と表現』大修館書店
- 井上和子 (1995) 「他動性と使役構文」, 徳永美暁 (編) 『言語変容に関する体系的研究及び日本語教育への応用』平成 6 年度科学研究補助金一般研究 (B) 研究結果報告書
- 権田直弼 (1884) 「語学自在」, 島田昌彦 (編) (1979)
- 島田昌彦 (1979) 『国語における自動詞と他動詞』明治書院
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 徳永美暁 (2004) 「日本語の語用—話者が直接関与する事柄の表現について—」『学苑』平成 16 年 11 月号, 昭和女子大学
- . (2005) 『『ガールフレンドが私に手紙を書いた』は適格文か?』『高見澤孟先生古希記念論文集』記念論文集編集委員会
- 北條忠雄 (1977) 「動詞の自他およびその相性の展開と転換」『国語学研究 16』pp. 1-12. 東北大学文学部「国語学研究」刊行会
- 本居春庭 (1828) 『詞の通路』(島田昌彦解説, 勉誠社文庫 25-26 (1977), 勉誠社)
- Hopper, Paul & Sandra A. Thompson. (1980) "Transitivity in grammar and discourse." *Language* 56. 251-99. LSA.
- Ikegami, Y. (1991) "'Do-language' and 'BECOME-language': Two Contrasting Types of Linguistic Representation" in Ikegami (ed.) *The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture*. Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.
- Jacobsen, W. M. (1991) *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Kurosio Publishers.

- Tokunaga, M. (1985) "A Strategy for Objective Expressions in Japanese." *Journal of Asian Cultures*, Vol. 9. UCLA.
- . (1986) *Affective Deixis: A Case Study of Japanese Directional Verbs*. Ph. D. dissertation, The University of Michigan, Ann Arbor. University Microfilm International.
- . (1988 b) "Paradox in Japanese Pragmatics." *Papers in Pragmatics*, Vol. 2. no. 1/2. International Association of Pragmatics.
- . (1993 c) "Dichotomy in the Structures of Honorifics in Japanese." *Pragmatics*, Vol. 2. no. 2. International Association of Pragmatics.

(とくなが みさと 日本語日本文学科)